

歌の周辺

昭和62年の作。そのころ東池袋のサンシャインシティにあつた短歌教室の受講生たちと一緒に池袋駅から西武池袋線に乗って、埼玉県の飯能市まで行ったことがある。その時「近づきて息ほそめ見る武州ぶしゅうの奥飯能おくはんのうに咲くあめふりあさがほ」という歌を詠んでいるから、植物園か何かを訪ねたようだ。その歌に続く掲出歌は、その泥地に咲く黄あやめを詠んだのだろう。植物は雄蕊・雌蕊があるから徹かに〈性〉はあるにしても、人間のような生々しい性愛は無い。その植物の清々しさに対する憧れを詠んだ一首である。（高野公彦）



(写真・木畑紀子)

高野公彦うた紀行・50

植物は性愛あらぬしづけさに泥地どろちに
群れて黄あやめ咲けり

— 『水行』

【鑑賞】「天の凹」十七首の十三首目。抽出歌の上句は作者の仕掛けである。否定して詠んで肯定になるのだ。この歌の次に「むだく」とは愉楽のことは真麻群まそむらの匂ふ月夜を抱き合ふめ女男やの歌が並んでいて、続けて読んだとき読者は高野マジックに気付く。作者は湿地に美しく咲く黄あやめの中に女性性じょせいせいを透視している。「水行」は性的な歌を内包している歌集だ。

(水上比呂美)



ふるさとコレクション——221

睡足軒（埼玉県新座市）

埼玉県新座市は県の最南端にあり、ほぼ全域が武蔵野台地に位置する。東京都に隣接し、私の住む西東京市の北側は少し足を延ばすと新座市となる。その新座市野火止に、関東地方で名高い禅刹のひとつ平林寺があり、境内林は約43ヘクタールにわたり雑木林が広がっている。

写真の睡足軒^{すいそくけん}は、その平林寺境内林の一部である睡足軒の森にあり、平林寺正面入り口の向かい側に位置する。国天然記念物の指定を受けたこの森は、2002年から一般の方も散策ができるようになった。見学の人の絶えない平林寺に比べてひっそりと静かでこじんまりとした佇まいは、ころろが落ちつく場所でもある。

国登録有形文化財（建造物）の睡足軒は、「電力の鬼」と呼ばれた実業家で近代三茶人のひとりに数えられている松永安左エ門が、飛騨地方の古民家を移築したものである。豪雪地ゆえの工夫が施された民家には簡易な茶室もある。安左エ門は60歳から始めた茶道に並みならぬ情熱をそそぎ、晩年は親しい友をこの草庵に招き、茶会に遊んだという。屋内の囲炉裏の間が、少し開かれた戸の隙間から覗くことが出来るが、磨き上げられた床板やしつらえの美しさに、しばらくは目を離すことが出来なくなる

（写真・解説：中村 敬子）